

イザヤ書 61 : 1

コリントの信徒への手紙二 1 : 21

「キリスト」

(ハイデルベルク信仰問答 問 31~32) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】

【招詞】 テモテへの手紙一 1 : 15a

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 61 : 1、コリントの信徒への手紙二 1 : 21

【説教】 「キリスト」

<キリストとキリスト者>

わたしたちは、わたしたちの救い主のことを「主イエス・キリスト」と呼びます。

今は毎週「ハイデルベルク信仰問答」という信仰の書物を用いて、聖書の御言葉を聞いていますが、今日の間 31~32 は、イエスさまが「キリスト」と呼ばれることの意味と、その恵みについて、語っているところです。

「キリスト」。この一語に、実に多くのことが込められているのです。

また、今日のところで、もう一つわたしたちが聞くべきことは、この「キリスト」と呼ばれるお方を信じたなら、今度はわたしたちが、「キリスト者」、「クリスチャン」と呼ばれる者になる、ということです。

キリストの救いを信じた者は、キリストの名前を身に帯びる者になるのです。

それは、わたしたちがキリストの一部になるということであり、イエス・キリストと呼ばれるお方と一体になって、キリストと共に生きるようになるということです。

そのようにして、「キリスト者」となったわたしたちは、どのように生きるようになるのか。今日の「ハイデルベルク信仰問答」問 31~32 は、そのように「キリスト」と「キリスト者」について、語ろうとしています。

<キリスト>

さて、まず「キリスト」についてです。「イエス・キリスト」と言う時に、「イエス」は名前ですが、「キリスト」は苗字ではありません。「キリスト」とは称号であり、肩書です。

「キリスト」という言葉自体は、ギリシア語で「油注がれた者」という意味です。ヘブライ語にすると「メシア」となります。

旧約聖書の時代、イスラエルの民の中で、神さまから特別な任務を受けた人は、油を注がれ、聖別されました。それが、「油注がれた者」、「メシア」です。そうして、神さまの力を注がれて、神さまのための特別な任務を果たすのです。

油を注がれる務めは、大きく三つありました。まず、神さまの御言葉を預かって、民に告

げる「預言者」。そして、神さまに、民の罪を贖うために動物の犠牲を献げ、執り成しをする「大祭司」。最後に、神さまの御心に従って、民を支配し、治める「王」です。

神さまの御心に従って、これらの務めを担うために、預言者、大祭司、王として立てられた者は、聖別され、油を注がれたのです。

やがて、油を注がれた者は、「神さまの御心を行い、その務めを担う者」ということで、神さまが約束された、将来、民を救うために遣わされる「救世主」のことを、ユダヤ人たちは「メシア」と呼んで、待ち望むようになりました。「メシア」は、神さまの救いを實現して下さる「救い主」を意味する呼び名となったのです。

そして、その「メシア」として遣わされた方こそ、神の御子イエスさまでした。

ですから、わたしたちが「イエス・キリスト」とお名前を呼ぶ時、それは「イエスというお方は、キリスト、メシアです」「イエスという方は、救い主です」と、告白していることになるのです。

神の御子イエスさまが、「メシア」として任職されたのは、聖霊を注がれ、父なる神さまが宣言されることによってでした。

今日の「ハイデルベルク信仰問答」の間31を見てみましょう。こうあります。「問31 なぜこの方は『キリスト』すなわち『油注がれた者』と呼ばれるのですか。」「答 なぜなら、この方は父なる神から次のように任職され、聖霊によって油注がれたからです。」

このことは、ルカによる福音書3:21~22で、イエスさまが洗礼をお受けになる場面に現わされています。そこには、こう書かれています。

「民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた。」

聖霊が下り、父なる神の御声が聞こえた、このイエスさまの洗礼の場面が、イエスさまの油注ぎ、イエスさまが救い主として任職された場面であるとされています。

また、この場面から、イエスさまの「救い主」としてのお働きは、三位一体なる父、子、聖霊なる神さまが共に働き、實現して下さったことである、ということが示されています。

このようにして、イエスさまは油を注がれ、メシア、救い主として、神さまの救いを實現する務めを担って、十字架への道を歩み始められたのです。

<三職>

そしてイエスさまは、旧約聖書の油注がれた者、「預言者」「大祭司」「王」が担った務めを、「メシア、救い主」として、確かにすべて果たされました。

教会では昔から、このイエスさまの「メシア」としてのお働きを、「キリストの三職」と呼んで、理解してきました。イエスさまが、油注がれた者として、メシア、キリストとして、確かに預言者と、大祭司と、王の三つの職務を、完全に担って下さった。この方こそ唯一の、まことの、油注がれた方、「メシア」である。教会は、そう受け止め、信じてきたのです。

[預言者]

「ハイデルベルク信仰問答」問 31 では、「キリストの三職」をこう語っています。

まず預言者。「わたしたちの最高の預言者また教師として、わたしたちの贖いに関する神の隠された熟慮と御意志とを、余すところなくわたしたちに啓示し…」とあります。

イエスさまは、神の御子でありますから、父なる神の御心、ご意志、ご計画を完全に、すべてご存知です。そのイエスさまが、地上でわたしたちに、神さまの御心、神さまの御言葉を、余すところなく伝えて下さいました。いやむしろ、イエスさまご自身こそが、神の言葉そのものでありました。

イエスさまが余すところなく伝えて下さったのは、「わたしたちの贖いに関する神の隠された熟慮とご意志」です。つまり、わたしたちの罪の赦しに関することを、罪を贖い、赦しを与え、悲惨から救い出して下さる、その神さまの救いのご計画と御心とを、イエスさまがご自分の御言葉で、十字架と復活の御業で、ご生涯全体で、ご自身の存在そのもので、わたしたちにすべて明らかにし、実現して下さいました。

この方こそ、わたしたちに神さまの御心を教えて下さる「最高の預言者」です。

[大祭司]

そして、次に大祭司。問 31 にはこうあります。「わたしたちの唯一の大祭司として、御自分の体による唯一の犠牲によってわたしたちを贖い、御父の御前でわたしたちのために絶えず執り成し、…」。

大祭司とは、民の罪を贖うために動物の犠牲を献げ、神さまと民との間に立って、執り成しをする務めです。しかし、人間の中から立てられた大祭司は、自分自身も罪を犯すために、自分とすべての民のために、年に一度、至聖所に入って、罪を贖うために動物の犠牲を献げなければなりませんでした。

しかし、「わたしたちの唯一の大祭司」として来て下さったイエスさまは、神さまと、すべての人間との間に立ち、何とご自分の体を、十字架の死によって、完全な犠牲として献げて下さったのです。神の御子が、わたしたちの罪の贖いのために生贄となられた。これ以上の罪の贖いはありません。

わたしたちが、イエスさまを「わたしの救い主と信じる」とは、この方の死による、完全な罪の贖いが、自分の罪を赦すためのものであったと信じ、受け取ることです。

ですから、もはやわたしたちは、罪の贖いのために、動物の血を献げる必要は全くなくなったのです。

そして、十字架の死によって、わたしたちの完全な罪の贖いを成し遂げ、復活し、天に上げられたイエスさまは。救いを信じて、なお罪を繰り返してしまうわたしたちのために、今も天の父なる神さまの御前で、大祭司として、絶えず執り成して下さいているのです。

イエスさまは、わたしたちの罪のために、ご自分を献げて下さったお方です。ですからイエスさまは、わたしたちと神さまとの間に立って、「この者は、わたしの十字架の死によっ

て罪を赦された者ですから、どうぞお赦し下さい」、「この者の罪は、わたしがすべて担って償いましたから、この者を赦しの内において下さい」、「この者が負うべき裁きは、わたしがすべて負いましたから、この者を罪によって裁かないで下さい」。そういつて、今この時も、これからも、わたしたちのために、執り成し続けて下さるのです。

[王]

そして最後に、「王」の務めです。ハイデルベルクにはこうあります。「わたしたちの永遠の王として、御自分の言葉と霊によってわたしたちを治め、獲得なさった贖いのもとに、わたしたちを守り保ってください。」

この世の人間の王は、軍事的な力で、あるいは権力で、人々を支配し、治めます。また、王というのは、敵と戦って、国民を守り、保ちます。

しかしイエスさまは、この世の力ではなく、武力ではなく、ご自分の言葉によって、わたしたちを治めて下さいます。ご自分の言葉。罪の贖いを告げる、救いの御言葉です。それは、神さまの愛によるご支配に他なりません。

そして、「獲得なさった贖いのもとに、わたしたちを守り保って下さる」のです。イエスさまがわたしたちの王として、罪と、悪と、死と戦って下さり、獲得して下さった罪の贖いのもとに。イエスさまが戦い、罪と死に勝利して下さった、その恵みのご支配のもとに。わたしたちを、守り保って下さるというのです。

このイエスさまのご支配は、「御言葉と霊によってわたしたちを治め」とあるように、霊によるご支配であり、この世においては目に見えません。イエスさまのご支配は、信仰の目によって見つめるご支配です。しかし、それは、わたしたちの目に見える現実よりも、はるかに確かで、揺るぎのないご支配です。そして、やがて終わりの日には完成して、すべてが明らかにされるご支配です。

地上の王の支配は、いつか必ず終わります。でも、復活なさったイエスさまのご支配は、永遠に終わりません。この方こそ、わたしたちの「永遠の王」なのです。

…これまでも、今も、これからも、イエスさまはそのように「メシア、キリスト」として、この三職を担い、預言者として、大祭司として、王として、わたしたちのために働いて下さいます。

わたしたちは、このイエスさまを、わたしの「キリスト」、わたしの「救い主」と呼び、この方の御言葉に導かれ、この方の祈りに執り成され、この方のご支配の内に守り保っていただきながら、信仰の生涯を歩んでいくのです。

<キリスト者>

そしてハイデルベルクの面白いところは、「キリスト」について語ることで終わらないところです。「キリスト」とは、こういうお方だ。それを聞いたわたしたちは、自分もまた、この「キリスト」という名をもって呼ばれる者になる、ということを知らされるのです。

問 32 はこう問うています。「しかし、なぜあなたが『キリスト者』と呼ばれるのですか。」
そうです。イエスさまの救いを信じ、洗礼を受けた者は、「キリスト者」、「クリスチャン」と呼ばれるようになります。「キリスト」という、あの最高の、唯一の、永遠の称号を、このわたしが身に帯びることになるのです。

答にはこうあります。「なぜなら、わたしは信仰によってキリストの一部となり、その油注ぎにあずかっているからです。」

わたしたちが信仰を与えられ、イエスさまを救い主と信じて、洗礼を受けること。それは「信仰によってキリストの一部」となることである、と語られています。

洗礼を受けて、イエスさまと結ばれる。イエスさまと一つになる。聖書では、わたしたちはキリストの肢体である、という言い方があります。また、イエスさまがぶどうの木で、わたしたちはその枝である、とも言われます。わたしたちはイエスさまに繋がれるのです。

そうしてわたしたちは、イエスさまの十字架の死をいただいて、自分も罪に死んだ者となります。そして、イエスさまの復活の命に生かされて、神さまと共に生きる者となります。それが洗礼を受けるということです。罪に死んだわたしたちは、イエスさまの命に結ばれて、そこから恵みをいただいて、新しく生きる者になるのです。

今日読まれた、コリントの信徒への手紙二 1 : 21 にはこうありました。「わたしたちとあなたがたとをキリストに固く結び付け、わたしたちに油を注いでくださったのは、神です。」

わたしたちは、神さまによって、キリストに固く結びつけられたのです。

固く結びつける、と訳されている言葉は、定着する、強固で揺るぎない、という意味の言葉です。もう決して離れることがないように、揺らぐことがないように、わたしたちは神さまによって、固く、しっかりと、イエスさまに結び合わされたのです。

そうしてわたしたちは、イエスさまのもの、イエス・キリストの一部となりました。もはやわたしたちは、救い主であるイエス・キリストと、分ち難く一つなのです。

それゆえに、わたしたちもまた、キリストに繋がる者として、キリストの名で呼ばれる者となり、キリストの油注ぎにあずかる者となるのです。

「キリスト」とは、ただの記号ではありません。「キリスト」とは、先ほど教えられたように、神さまに召しだされて、油を注がれて、神さまの御心を行う三職を担う者こそが与えられる称号なのです。その「キリスト」の名で、わたしも呼ばれる。

これは、思えばとても大変なことです。それは、わたしたちもまた油を注がれ、この「キリスト」のお働きを、わたしたちなりに担うように、召されているということなのです。

問 32 の答えを読んでみましょう。「答 なぜなら、わたしは信仰によってキリストの一部となり、その油注ぎにあずかっているからです。それは、わたしもまた、この方の御名を告白し、生きた感謝の献げ物として自らをこの方に献げ、この世においては自由な良心をもって罪や悪魔と戦い、ついには全被造物をこの方と共に永遠に支配するためです。」

ここには、キリストと一つにされた者が担うべき、キリスト者の三職の務めが語られています。キリスト者にもまた、預言者、祭司、王の務めが与えられるのです。

[預言者]

まず「わたしもまた、この方の御名を告白し」とあります。イエス・キリストの名を告白する。この方がわたしの救い主であると、世の人々に、公に告げる。それは、イエスさまこそ救い主であるという、まことの福音を世界に告げ知らせる、預言者の務めを担うことです。

[祭司]

そして次に、「生きた感謝の献げ者として自らをこの方に献げ」る、とあります。

自分の罪の贖いのための献げ者は、イエスさまがわたしのためにご自分を献げて下さったので、もう永遠にする必要はありません。ですから、わたしたちは、自分を「生きた感謝の献げ者」とするのです。罪を完全に贖われた喜びと感謝を、この体を献げることによって、イエスさまにお返しするのです。それは、わたしたちが、神さまに心からの礼拝を献げる、ということに他なりません。これが、わたしたちの「祭司」としての生き方です。

また、わたしたちが隣人のために祈ること、執り成しをすることも、キリスト者としての、祭司の務めです。それぞれの家庭に、職場に、今与えられている場所に、キリスト者は、祭司として遣わされているのであり、人々の救いのために祈る務めが与えられているのです。

[王]

そして、最後に、「この世においては自由な良心をもって罪や悪魔と戦い、ついには全被造物をこの方と共に永遠に支配する」とあります。

先ほど、王とは敵と戦うものであるとお話ししました。わたしたちもまた、この戦いに与るのです。キリスト者として戦うべきは、神さまから遠ざけようとする罪や悪の力です。

キリスト者の人生の歩みは、戦いに満ちています。信仰をもったからといって、悩みがなくなったり、苦勞がなくなったり、問題が起こらなくなるのではありません。むしろ、信仰をもっているからこそその悩み、苦しみ、問題を抱えることさえあるのです。

でも、キリスト者の人生の喜びは、慰めは、自分がキリストのものとしてされている、というところにこそあります。わたしたちは、どのような時にも揺らぐことのない、失われることのない、本当の喜びに、慰めに、キリストご自身に、神さまによって、固く結び合わされているのです。

もし、キリストと結ばれていないなら、わたしたちは、日々の波風の中で、あっという間にどこかへ押し流されていくに違いありません。そして自分を見失い、目標を見失い、不安と、恐れと、孤独の中で、心は散り散りになってしまうでしょう。

しかし、わたしたちは、すでにキリストの一部となってしまうています。わたしたちの罪にも、死にも、すでに勝利された王なる方が、片時も離れず、わたしたちを守り保っておられるのです。

そうであるならば、わたしたちはこのキリストにこそ、自分の人生の土台を据えて立ち、

この世の罪や悪と戦い、混乱の中でも平安を失わず、困難を耐え忍んで、歩いていくことが出来るのです。

ですからこれは、キリスト者が素晴らしいから、立派だから、戦ったり、耐えたりできる、というわけではありません。キリスト者とは、むしろ、神さまに何もかも頼らなければ生きられない人のことなのです。

でも、神さまに何もかも頼れると知っているからこそ、キリスト者は、生きることができし、戦うことができるし、耐え忍ぶことが出来るのです。

また、ハイデルベルクには「自由な良心をもって罪や悪と戦い」とありました。自由な良心です。わたしたちは、ただお一人の王さまであるイエスさまに従います。そうであるなら、この世の誰にも、他の何にも、支配されることはありません。キリスト者は、この世のものからは、自由にされているのです。

でもこの自由は、自分の好き勝手にすることとは全然違います。本当の自由とは、愛のために、何でもすることが出来る自由のことです。

神さまを愛するためになら。隣人を愛するためになら。わたしたちはこの世のものに縛られることなく、この世とは違う戦い方で。わたしたちを愛して下さったイエスさまに倣うやり方で。自由な良心をもって、この世の罪や悪と戦っていくのです。

そして、ハイデルベルクは最後に「ついには全被造物をこの方と共に永遠に支配する」と語っています。王なるイエスさまが、再び来られて、世の終わりの日に神の国を完成させて下さる時。わたしたちもまた、この王なる方に結ばれている者として、この方と共に永遠に支配する栄光に与る。そう約束されているのです。

またこれらは、キリスト者の群れである、「教会」に与えられた働きでもあります。

教会もまた、ペンテコステの日、聖霊によって油を注がれました。教会は、これまでも、今も、これからも、預言者として福音を告げ知らせ、祭司として礼拝をささげ、執り成し祈り、そして王として、世にあって神のご支配を現わす群れとして、神の国の完成の時まで、世の罪や悪と戦いつつ、歩いていくのです。

<油を注いで下さったのは、神>

…さて、わたしたちは、「キリスト者」と呼ばれることの、あまりの重さに、めまいを覚えるかも知れません。自分には担えない、ふさわしくない、と思うかも知れません。

でも、今日の聖書の御言葉に、「わたしたちとあなたがたとをキリストに固く結び付け、わたしたちに油を注いで下さったのは、神です」とあったように。神さまが、わたしたちを「キリスト者」にし、神さまが、わたしたちに油を注いで下さったのです。

わたしたちは、ただ神さまの恵みによって、この「キリスト者」としての新しい生き方へ押し出されていくのです。

そもそも、罪人のわたしが「キリスト者」と呼ばれること自体、奇跡のような神さまの御業によるものなのです。それはただ、イエスさまの救いの御業によって、キリストのお働きによって、わたしの上に実現したことです。

そうであるならば、「キリスト者」としての歩みも、この方が、実現させて下さる。この方が、わたしと一つに結ばれて下さったこの方が、わたしに恵みを注ぎ、力を注ぎ、命を注ぎ、このことをなさしめて下さる。そう確かに、信じてよいのです。

このような弱い者でも、罪深い者でも、疑い深い者でも、「キリスト者」と呼ばれる者とされた。この驚きと、恵みと、感謝を、深く心に持つところから、わたしたちキリスト者の歩みは始まります。

わたしたちは、「キリスト者」と呼ばれることを、心から誇りに思っ。キリストと固く結ばれたことを、心から喜んで。召された務めを行うことが出来るように、祈り求めています。

【お祈り】

天の父なる神さま

御子イエスさまを、わたしたちのキリストとして、メシアとして、救い主として、油を注ぎ、お遣わし下さったことを、心から感謝いたします。

イエスさまと一つに結ばれたわたしたちもまた、キリスト者と呼ばれる者となり、あなたから大切な務めを預かっています。どうか、わたしたちが、救いの恵みを喜んで語り、自分を喜んでささげる礼拝を為し、隣人のために執り成し祈り、そして罪や悪を退けて、愛の業に生きることが出来るよう、導いて下さい。

また、一人でも多くの者が、恵みによって、イエスさまと結ばれますように。

このお祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】 505 「歩ませてください」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 26 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン